

R18

野狐

大正妖

奇譚

もしもの話

イラスト◇**狛枝こころや**
狛枝こころや 著

 独りの舞文庫

野狐と大正妖奇譚

もしもの話

粕枝ころや著



独楽の独り舞文庫

目次

- 五 ◆はじめに
一三 ◆外道
七七 ◆こんな寒い夜は
八五 ◆分岐ルート
一〇七 ◆飲んでやろうか
一一七 ◆耳かき
一四九 ◆ローションガーゼ
一九三 ◆風邪っぴき
一九九 ◆アナルビーズ
二一五 ◆リバじゃないカップルは別れやすい
二六五 ◆尿道責め
二九五 ◆それだけ
三〇一 ◆苗字
三〇五 ◆お揃いの写真
三一 一 ◆夢じゃなかったんや
三二 一 ◆久しぶり
三二 九 ◆宗兄とショタ
三三 三 ◆女体化
三六 一 ◇あとがき
◇要素別索引

外
道

「くっそ…」

眠れねえ。ゴロゴロと寝返りを何度打つても眠気には至らず、むしろそれはむくむくと膨らむばかり。

明日も仕事なのに…。疲れ切った脳内とは裏腹にそれは勃ちあがって主張していた。

「疲れ魔羅ってやつかよ」

クソツタレ、と悪態をつけて布団から出る。おさまるのを待っていたらいつになるか分からない。ちんたら待つて深夜になつたらたまつたもんじゃないと戸棚を開けた。

棚の上にはガラスの小瓶。一度篠崎にも使ったことがあるこれなら効果は分かっている。明日に響いてもさほど影響はないだろうと、中の媚薬を二、三粒ほど水で飲み下した。

「…」

効果が出るまで暇なので、新聞を読む。犯罪の話が多い。古今東西、迷惑な輩もいるもんだ。

迷惑な輩といえば…思い出してしまった。伍代とかいう奴らの事を。なんで今更…?ぶるりと背筋が震えた。

ガタ、と小さな音がしてピクリとそちらを見る。玄関から…?いや、これは。

「誰だ!!」

立ち上がり大声を出すと同時に、庭に続く障子が勢いよく開いて見覚えのある男が小刀を構え顔を出した。

「威勢がいいなあ漢三!」

「み、三雄…!?!」

つてことは玄関のはまさか…

「こんな簡単な鍵じゃ防犯にもなりませんねえ、危ないですよ?漢三さん」

「…ッ四津…!」

じりじりと滲み寄る二人から後ずさつて逃げる。

「テメエら…！あれで手エ引くんじゃなかったのかよ！」

ドン、と背中を壁に打ち付けてしまい冷や汗をかいた。

「伍代さん達は手を引きませんが私は別ですよ。私はあなたが好きなので
うふふ、と口元に手を添えて笑う四津。

「…く…強盗か？金目のモンならくれてやるからさつさと出て行け」

「そんなものには興味ないですよ」

「うるせえ四津。俺は欲しい。どこだ？」

「…そこの棚の一番下」

ほう、と三雄が引き出しを開ける。中には通帳が入っていた。

「ふうん…結構持つてんじゃない。ありがたくいただくぜ」

「さつさと出てけよ」

「三雄、もういいです？」

「ああいいよ。好きにしな」

「は？近…っ」

気づいた時には四津が目の前に立っていた。そして屈んで抱きしめられてしまった。

「ね、漢三さん？三雄との話はもう終わりましたよね」

「う、わ！やめろ!!」

頬を撫でて顔を近づけられる。すりすり、と頬擦りされてゾワゾワと背筋が凍る。

そのまま体を密着させて壁に押し付けてきた。

「今夜は二人で楽しく過ごしましょうね…♡」

「嫌だ!!離せッ!くそっ」

身を振りなんとか逃げ出そうとするも、一回り背の高い四津に抱き包められてしまつては敵わない。

外道

「無駄な抵抗はよして私に身を預けてくださいな。良くしてあげますから」

「絶ッッッッ対に嫌だ!!ぶっ殺すぞ!!」

一七

「ああ威勢が良い…♡ふふ、逃げないでくださいね」

四津が懐から金属製の何かを取り出して漢三の腕を拘束した。

「おい、外せ！何だこれッ」

「手錠と言いましてね、警官からくすねてきたのです。縄より簡単に拘束できるんですよ。便利でしょう？」

「…お前につけてやれたら便利だと言つてやるよ」

「うふふ、その目、良いですね。本当に私好みの男です。ああ…早く犯したい。ほら、私のここももうこんなです。」

四津は着物を捲つてそそり立つ逸物を見せた。

薬のせいで火照つてきていた体が、ずくりと疼いた。

「…っ」

「あら、どうしました？」

「…汚ねえモン見せてんじやねえよ」

「ん…んー？むむ、漢三さん何かおかしいですね。顔が赤いような…」

「おかしかねえよ。クソツ…やるならさつさとやれ。気が済んだら帰れ！」

「おかしい、おかしいですよ。漢三さんはもつと抵抗するはず…」

「俺の何を知ってんだよ！知ったかぶりしやがつ…」

スルリと首筋を撫でられてしまいびくりと震えた。

「知ってますよ、あなたが篠崎さんとどんな性行為をするのかも、ね」

「な…」

驚く漢三の唇を塞ぎ、漢三が弱い首筋から頭皮そして耳元を触る。

「…っ」

「ふふ、びくついている。やはりここが弱いのは間違い無いですね」

「…この野郎…どこまで知ってる…？」

「んー…漢三さん、激しい行為しますよね。それこそ獣のように。いえ、元が獣で

すものね？仕方ありませんよねえ？」

「な…ッ、テメエその他に誰が知ってる！」

漢三は牙を剥き出しにして小声で怒鳴った。

一九 外道
「こらこら落ち着いて？…私だけです。今あなたが狼に戻って私を食い殺せば、

二〇 他にはだーれも知りません。しかし隣の部屋にいる三雄は怪しむでしょうけれど。」

「ぐ…」

「大人しく私の言うことを聞いてくれれば、漏らしませんよ。他ならぬあなたとの秘密ですからね」

「…クソツタレ」

「それはそれとして…漢三さん、やはり何か変ですね。風邪ですか？」

「風邪だったらやめるのかよ」

「いいえ？」

「だろうな…誰がお前なんかに言うか」

「ふうん…？じゃああなたのここがこんなになつてる理由はこの状況に興奮してるからだと受け取って良いんですね…？」

「そう言つて四津は漢三の着物を捲る。…ギチギチに勃つたそれが顔を出した。」

「…」

眉間に皺を寄せ、ギリ、と歯を食いしばる。